

岩手県宮古市田老地区における応急仮設住宅居住者の生活再建の実感に関する基礎的研究

学生会員 ○菊池皓次^{※1} 正会員 平井寛^{※2} 南正昭^{※2}

1. はじめに

岩手県の沿岸部に位置する宮古市田老地区(図 1)は、2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災により中心部のほとんどが津波の被害を受けた。町の中心部から約 6 km 北にあるグリーンピア三陸みやこ(図 2)に建設された応急仮設住宅(407 戸)に約 700 人の被災者が生活しており、これらの人々の生活再建が課題の一つとなっている。過去の研究では、震災復興には生活再建の実感も重要な要素で、居住環境との関わりもあると指摘されており、生活の現状やニーズを明らかにすることは復興につながる第一歩と考えられる。本研究では、今後のまちづくりへ活かすことを見据え、応急仮設住宅居住者の生活環境を把握し、復興の実感に関する要因について検討することを目的とする。

2. 研究方法

田老地区は平成 22 年度時点で総人口 4302 人中 65 歳以上の人口割合が 33.0% (1421 人)と高齢化の進んだ地域であることから、応急仮設住宅に居住する高齢者を中心に直接訪問する形式で、2011 年 7 月(対象者 40 人)、10 月(対象者 52 人)にヒアリング調査を実施した(5 月にも数人を対象に実施)。調査内容は、買い物等の活動状況、衣食住の満足度、復興やまちづくりに関する意識、個人属性である。これらの調査データより、生活環境の現状をまとめていく。

3. 調査結果及び考察

7 月、10 月に行ったヒアリング調査の、それぞれの項目について調査結果をまとめ、考察していく。



図1 田老地区の位置

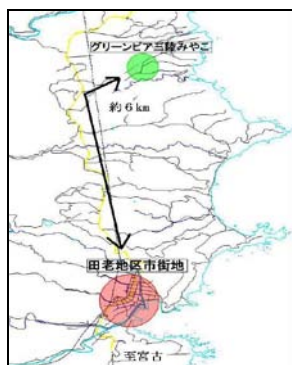


図2 田老地区概要図

表1 回答者の年齢・性別構成

	50代以下	60代	70代	80代	90代	無回答
7月	10.0%	32.5%	45.0%	7.5%	0.0%	5.0%
10月	15.4%	26.9%	38.5%	13.5%	1.9%	3.8%

7月→男性37% 女性63% 10月→男性27% 女性73%

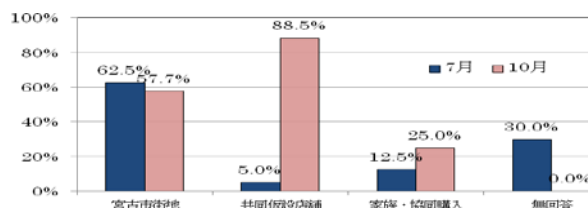


図3 買い物の行き先

1) 回答者の年齢・性別構成

7 月・10 月に行ったヒアリング調査回答者の年齢と性別をまとめたものが表 1 である。どちらの調査でも 60、70 代の割合が高く、全体の約 7 割を占めている。

2) 買い物・通院の活動状況

グリーンピア三陸みやこの応急仮設住宅団地内には、共同仮設店舗と診療所が存在する。また約 16km 離れた宮古市街地へ路線バスも通っており公共交通も確保されている。宮古市街地の病院へ通院する場合バスの利用が多く見られた。共同仮設店舗は 5 月に露店型としてスタートしたが、9 月からはプレハブ型となり、店舗数も増加した。

図 3 は買い物の行き先を示したものであるが、共同仮設店舗の利用者が大幅に増加したことがわかる。近いこと、品揃えが良くなったことが要因として挙げられる。自分で自動車を所有している方が全体の 4 割程度であったが、買い物や通院といった日常的な活動が確保されていることが確認できた。

3) 衣食住・交流の満足度

衣食住や交流(コミュニケーション)の満足度を、1:とても不満~4:どちらでもない~7:とても満足の 7 段階評価で回答をしてもらった。表 2 に各項目の満足度を示す。

住の満足度のみ 10 月に平均点が上昇している。他の項目ではどれも満足度は低下した。7 月調査で「玄

キーワード: 岩手県宮古市田老地区 応急仮設住宅 生活再建

※1 岩手大学大学院工学研究科社会環境工学専攻

連絡先: 岩手県盛岡市上田 4-3-5 TEL:019-621-6454 FAX:019-621-6460

※2 岩手大学工学部社会環境工学科

表2 各満足度の点数分布表

	衣の満足度		食の満足度		住の満足度		交流の満足度	
	7月	10月	7月	10月	7月	10月	7月	10月
平均	5.08	4.32	5.33	5.15	4.11	4.58	5.14	4.96
1	0.0%	3.8%	0.0%	0.0%	2.5%	1.9%	0.0%	0.0%
2	2.5%	3.8%	0.0%	0.0%	10.0%	1.9%	5.0%	1.9%
3	10.0%	19.2%	10.0%	11.5%	22.5%	19.2%	5.0%	5.8%
4	7.5%	21.2%	7.5%	17.3%	12.5%	21.2%	12.5%	30.8%
5	35.0%	30.8%	22.5%	28.8%	22.5%	25.0%	27.5%	19.2%
6	27.5%	13.5%	42.5%	28.8%	15.0%	21.2%	20.0%	13.5%
7	7.5%	3.8%	7.5%	13.5%	2.5%	5.8%	15.0%	15.4%

表3 復興の実感と交流満足度

	復興の実感ない		復興の実感ある		無回答		総計	
交流満足度	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
1点	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
2点	1	2%	0	0%	0	0%	1	2%
3点	3	6%	0	0%	0	0%	3	6%
4点	12	23%	4	8%	0	0%	16	31%
5点	7	13%	3	6%	0	0%	10	19%
6点	3	6%	4	8%	0	0%	7	13%
7点	2	4%	5	10%	1	2%	8	15%
無回答	4	8%	3	6%	0	0%	7	13%
総計	32	62%	19	37%	1	2%	52	100%

関に雨が入ってくる」「砂利道が歩きづらい」などの不満が挙げられたが、9月に風除室の設置や住宅の周りの道が舗装されたなど居住環境が改善され、これにより満足度が上がったものと考えられる。衣については、「冬物の衣服が少ない」「出かける時の衣服がない」というような意見が多くあり、満足度が低下したものである。また食の満足度は10月の調査では唯一平均が5点を超えている。買い物の活動が確保されていることや、10月の調査で約8割の方が震災前と同じような食事を取れるようになってきたと回答していることが関係していると考えられる。交流に関しても平均点5.14から4.96に低下したが、10月の調査で「近所に顔見知りの人が多い(52人中84.5%)」「ほぼ毎日誰かと話す(52人中50.0%)」という人が多く見られ、調査対象中の単身世帯でも同様な結果であった。これより、元の居住地区ごとに応急仮設住宅に入居した効果が現れていることがわかる。

4) 復興の実感について

10月の調査では、「復興を実感する」と答えた方は19名(37%)であった。表3から復興の実感がある人の多くが交流の満足度が高いことがわかる。10月に調査した各満足度との関係を、目的変数を復興の実感の有無、説明変数を表2で示す4つの満足度の得点として多重ロジスティック回帰分析を用いて調べたところ(表4)、交流の満足度が影響の強い変数であることがわかり、コミュニケーションに充実を感じているほど復興の実感を持ちやすいということが考えられる。

どれだけ人と話す機会があるかという交流頻度と交流満足度の平均点との関係を表したのが表5である。

表4 復興感と交流満足度(多重ロジスティック回帰分析)

目的変数	95%信頼限界				
	偏回帰係数	標準誤差	下限	上限	標準偏回帰係数
0:実感なし					
1:実感あり	0.9785	0.3828	0.2282	1.7288	1.2831
説明変数	P 値	オッズ比	下限	上限	
交流満足度	0.0106	2.6604	1.2563	5.6338	

目的変数:復興を実感しない→0、復興を実感する→1

説明変数:衣・食・住・交流の満足度(1～7点)として分析を行った

表5 交流の頻度と満足度の関係(10月調査結果より)

交流の頻度	週1～2回	週3～4回	週5回以上	全体
交流満足度の平均点	4.5	5.28	5.25	5.03

交流頻度が週1～2回の場合に比べると、週3～4回以上の方が平均点は高く、交流の頻度が多い人ほど満足度が高いという傾向が見られる。

4. 結果のまとめ

1) 交通弱者になりがちな高齢者の多い中で、応急仮設住宅団地内に設けられた仮設店舗や診療所、宮古市街地へ向かう路線バスなどの効果が見られ、買い物や通院の日常的な活動が確保されていることがわかった。

2) 食・交流の満足度は安定しており、住の満足度は上昇していた。食事面では元の生活に戻ってきたこと、交流面では近所付き合いが多いことが要因であると考えられる。住まいでは9月に実施された住宅改善が大きく影響していると考えられた。

3) 復興の実感と交流の間に関係性が見られ、人とのつながりが充実しているほど復興の実感を持ちやすいということがわかった。

これらより、仮設店舗や住宅等のハード面の整備は一定の生活環境を確保するのに効果的であるとともに、復興の実感というのは人とのつながりが大きく関わっており、ソフト面の整備の重要性が示唆された。

5. おわりに

今回の研究では2011年7月と10月に実施した2回の調査結果を元に考察を行ったが、時系列変化を追っていくために今後も調査を継続していきたい。また田老地区、都市計画学研究室の皆様には多大なご協力を頂いた。関係各位に対し、謝意を表する。

参考文献

- 1) 国土地理院 数値地図
- 2) 平成22年国勢調査 人口等基本集計結果
- 3) 竹中裕美他4名：新潟中越沖地震における被災者の避難先移行プロセスと生活再建実感、日本建築学会大会学術講演梗概集、2008、335－336